

# 美術の授業への興味関心 —「好き」「嫌い」そこから見えてきたもの—

久保田美和<sup>1)</sup> 小橋暁子<sup>2)\*</sup>

<sup>1)</sup>千葉市立磯辺第一中学校 (千葉大学大学院) <sup>2)</sup>千葉大学・教育学部

## Junior high school student's Interest about Art class —Through questionnaire survey—

KUBOTA Miwa<sup>1)</sup> KOBASHI Satoko<sup>2)</sup>

<sup>1)</sup>Isobe Daiichi Junior High School, Chiba city, Japan <sup>2)</sup>Faculty of Education, Chiba University, Japan

美術科の授業は学習指導要領をもとに、表現及び鑑賞の授業を行っている。授業で扱う内容に関しては、どのような内容を選ぶかは生徒の実態と教諭の指導方針に基づく。他教科と比較すると教師に任されているという面が多いと言えるが、その反面、教師の指導力が求められる教科とも言える。美術教師としての経験をもとに題材を考える際の問題点について考えてみた。気づいた問題点は「生徒指導上の問題を理由に、教師が取り組みやすく、得意な題材を選択する傾向」「教科での生徒の実態調査の不足」「生徒が美術に何を求めているのかの把握の不足」ということである。美術科の時間数削減、教科のあり方を問われている時である。生徒が美術の授業に求めていることについて実態調査、考察し、これから扱う題材の方向性を見出していきたいと考えた。

キーワード：美術科教育 (Art education) 美術授業 (Art class) 中学生 (Junior high school students)  
実態調査 (Actual situation research) アンケート調査 (Questionnaire survey)

### 1. 意識調査実施にあたり

学習指導要領の美術科では教科の目標を「表現及び鑑賞の幅広い活動を通して、美術の創造活動の喜びを味わい美術を愛好する心情を育てるとともに、感性を豊かにし、美術の基礎的な能力を伸ばし、美術文化についての理解を深め、豊かな情操を養う。」<sup>1)</sup>としている。平成20年の改訂においては「美術文化についての理解を深め」が加えられ豊かな情操を養うことが一層、重視された。

この教科の目標をもとに従前の内容は「A表現」及び「B鑑賞」から構成されていたが、改訂では「A表現」「B鑑賞」及び〔共通事項〕から構成するように改めた。美術の学習活動が単に描くことや、つくることに指導の重点を置くのではなく、表現及び鑑賞の幅広い活動の中で、発想や構想の能力や創造的な技能、鑑賞の能力などを育成することを一層重視し、育成する資質や能力の視点から内容を整理されたからである。

「A表現」においては、絵画・彫刻・デザイン・工芸などの領域ではなく、以下のように整理された。

- (1) 感じ取ったことや考えたことなどを基に発想や構想する力 【発想や構想の能力】
- (2) 伝える、使うなどの目的や機能を考え、発想や構想する力 【発想や構想の能力】
- (3) 色、色彩、材料を使い、描いたりつくったりする技能 【創造的な技能】

さらに共通事項が新設され、表現及び鑑賞の各活動において共通に必要な形や色彩、材質などの性質や、

それらがもたらす感情を理解したり、対象のイメージをとらえたりする能力の育成を求められている。

美術科の教師は学習指導要領をもとに、表現及び鑑賞の授業を行っている。授業で扱う内容に関しては、どのような内容を選ぶかは生徒の実態と教諭の指導方針に基づく。他教科と比較すると教諭に任されているという面が多いと言えるが、その反面、教諭の指導力が求められる教科とも言えるだろう。

中学校の美術教諭が年間計画をたてる方法としては、「その学校の年間計画を踏襲する」「教諭自身が今までの実践した題材の中から、その学年の生徒の実態に合う題材を選ぶ」「他校の作品を参考にし、新たな題材を取り組む」「新たな題材を開発する」「予算をもとに考える」などがあげられる。筆者も中学校の美術科の教諭として20年以上勤務しているが、「教諭自身が今までの実践した題材の中から、その学年の生徒の実態に合う題材を選ぶ」傾向は強い。

これは教諭にとって二つの意味を持つ。一つは、その題材を通して美術で身につけさせたい力が育ったという経験。もう一つは、今まで実践した題材は、生徒の動向やつまづきが予測でき、丁寧に指導できるという安心感があるからである。また、中学校の美術の授業は生徒指導上の問題と向き合う場面も多い。学校に乱れが生じてくると授業中に刃物等が紛失するという事件も予想される。安全上の配慮も必要となり、生徒指導上の実態で題材が変更されることもある。このような経験を通し、教師は安心できる題材を選んでしまう傾向が強くなる。この結果、同じ題材を毎年行い続けているという事実も起こるのである。

\*連絡先著者：小橋暁子

美術科の教諭は、生徒が自分らしい考えをもち、表現を楽しみ、追及して欲しいと願っている。生徒も楽しそうに制作にし、仕上がった作品に多くの生徒が満足している状況であれば、同じ題材を扱い続けることもある。

しかし、筆者が教諭となった二十年前から比較しても、パソコン・ゲーム・携帯が日常となり、子どもたちの生活やとりまく環境は変化している。また教科の授業時数も減少し、教科の目指す方向や、教育課題も変化していく。その中で、従来の題材を以前と同様に扱い続けてよいのか、意味を問い直す必要があるのではないかと思に至るようになった。

筆者の美術教諭としての経験をもとに題材を考える際の課題点について考えた。「生徒指導上の問題」を理由に、「教師が取り組みやすく、得意な題材を選択する傾向」があり、「教科での生徒の実態調査の不足」「生徒が美術に何を求めているのかの把握の不足」ということが挙げられる。先にも述べたが美術科の時間数削減、教科のあり方を問われている時である。

そこで、不足傾向にある「生徒の教科への興味関心の把握」、および「美術の授業に生徒が求めていることについての実態調査」を行い、考察し、これから扱う内容や方法の方向性を見出していきたいと考えた。

本稿は、中学生へのアンケートをもとに、自らの実践を中学生たちの実際に変化させ、美術の授業内容の方向性を考えていくというものである。

## 2. 調査方法

- ①実施時期 平成23年12月
- ②調査対象 千葉市立磯辺第一中学校在校生1年～3年 240名(男子120名 女子120名)
- ③実施方法 美術の授業時間内に実施
- ④アンケート調査の方法  
表1については、ベネッセ教育研究開発センターの学習基本調査「(1)学習に関する意識・実態調査」をもとに、アンケート調査を作成し、全国との比較を行うため中学生の美術への興味関心のアンケートを実施した。  
表2の文言については、学習指導要領の目標をもとに作成した。全校生徒の美術に対する興味関心を四件法で行った。
- ⑤アンケート内容

表1 調査用紙内容

問1：あなたは次の教科の学習の時間がどのくらい好きですか。1)～9)のそれぞれにあてはまる番号に○をつけてください。

教科	とても好き	まあ好き	どちらともいえない	まあ嫌い	とても嫌い
国語	1	2	3	4	5
社会	1	2	3	4	5
数学	1	2	3	4	5
理科	1	2	3	4	5
英語	1	2	3	4	5
音楽	1	2	3	4	5
美術	1	2	3	4	5
体育	1	2	3	4	5
技術・家庭	1	2	3	4	5

表2 美術の学習について

2 美術の学習について聞きます。  
1)～6)のそれぞれについて、あてはまる番号1つに○をつけてください。

	そう思う	どちらかといえばそう思う	どちらかといえばそう思わない	そう思わない
美術の学習が好きですか	1	2	3	4
美術の学習は普段の生活に役立つと思いますか	1	2	3	4
美術の学習は心を豊かにするのに役立つと思いますか	1	2	3	4
ふだんの生活で、絵や彫刻などの美術作品を鑑賞することはありますか	1	2	3	4
美術の授業で作品を描くとき、表したいことを合わせて表現を工夫していますか	1	2	3	4
美術の授業で、よいアイデアが浮かぶように、あきらめずに考えようとしていますか	1	2	3	4
美術の授業でどんなことを学びたいですか	(自由筆記)			

- ⑥本アンケートを実施前の各学年の授業  
アンケートの実施前におこなわれた美術の授業の内容が生徒の回答に影響があると予想される。ここでは4月からの授業を一覧にした。  
表内の文言の内容については、「A表現(1)」は感じ取ったことや考えたことなどを基に発想や構想する力のことである。また「A表現(2)」は、伝える、使うなどの目的や機能を考え、発想や構想する力のことである。これらは、学習指導要領の中に記載されている事項である。

表3 アンケート実施前の授業一覧

	1年	2年	3年
A表現「題材名」	●「世界でたった一つ私だけの紋章」 平面：A表現(2) 	●「お気に入りを表そう」 平面：A表現(2) ●「心の顔」 立体：A表現(1) 	●「私だけの木彫時計」 立体：A表現(2)
	●「お気に入りパズル」 立体：A表現(2)		
B鑑賞	●「今の私からなりた未来の私へ」平面：A表現(1) ●「70枚の名画から、私のお気に入りをを見つけよう」		

\*「今の私からなりた未来の私へ」「70枚の名画から、私のお気に入りをを見つけよう」は全校の取り組みである。

### 3. アンケート結果と考察

結果および各アンケートからの考察それぞれのアンケート項目の結果と、そこから考えられることについて述べていく。

#### 3-1 教科について全国との比較

表1のように「好き・どちらかといえば好き・どちらでもない・どちらかといえば嫌い・嫌い」の五件法で全教科に対しての興味関心の調査を行った。本中学においては、美術（90%）、体育（78%）、技術家庭（75%）、音楽（68%）英語（52%）社会（50%）国語（49%）理科（45%）数学（43%）という結果で好き（「好き」「どちらかといえば好き」）であった。技能教科を好む傾向は高い様子が分かるが、全国調査<sup>2)</sup>と比較すると、本中学では英語、体育、美術、音楽、技術・家庭が極めて高い割合で「好き」「どちらかといえば好き」という回答であった。

#### 3-2 美術の学習についての調査（各項目）

表2から各項目における結果のグラフおよび、結果に対しての分析を行う。また可能な範囲で、学校内の様子から読み取れることを補足していく。グラフの数値は小数点第一位を四捨五入したものである。

##### ①美術の学習は好きですか

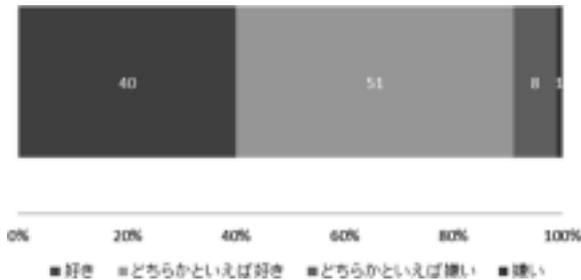


図1 美術の学習は好きですか

表2では、四件法で美術の授業についての好き、嫌いについての調査を行った。全校の40%が好き、51%がどちらかといえば好きと答えている。91%が美術の授業が好き傾向にあるといえる。

##### ②よいアイデアが浮かぶように、あきらめずに考えていますか

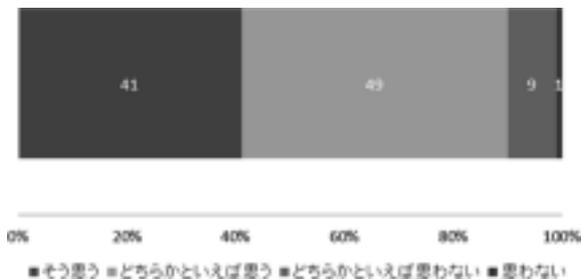


図2 よいアイデアが浮かぶように、あきらめずに考えていますか

全校の90%があきらめずに考えていると答えている。授業時の生徒への支援としては、アイデアを出す時間には、ワークシートなどを用い、アイデアが出なく苦慮している生徒については、教師が一对一で話し合う等

行っている。

また、アイデアを出すための資料づくりについて、教師が前時間に生徒に呼びかけると、次時には本、インターネットなどによる資料を学級のほとんどの生徒が準備してくる。なかには、家庭で作品について家族と相談してきたと話す生徒もいる。そのことから背景を推察すると家庭の学校での活動に対する支援があるということも垣間見られる。このような準備も含めてあきらめずに考える姿勢に繋がっていると考察できる。

##### ③作品を描くとき、表したいことに合わせて表現を工夫していますか

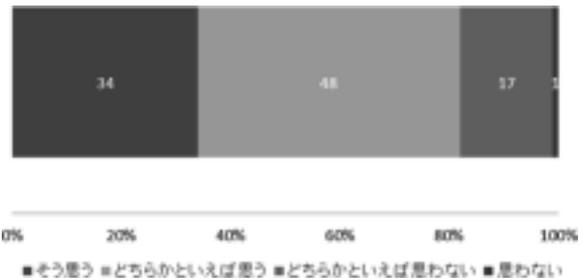


図3 作品を描くとき、表したいことに合わせて表現を工夫していますか

全校の82%が表したいことに合わせ表現を工夫していると答えている。

しかしこの数値は「よいアイデアが浮かぶようにあきらめずに考えるか」(図2)に比較すると若干低い。アイデアが浮かぶということが、表したいことに合わせて表現を工夫しているということに結びついていないことがみえてくる。

その理由としては、①表したいことがあり、使いたい技能があっても使うことができない②表したいことがあっても、工夫するための技能を思いつかない。③授業で教わったこと以外はしない等が考えられるだろう。

##### ④心を豊かにするのに役立つと思いますか

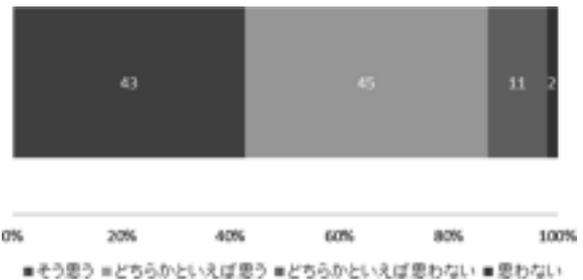


図4 心を豊かにするのに役立つと思いますか

心を豊かにすると考えている生徒は全校の88%である。図4については、図5と合わせて、次の項目でみていく。

##### ⑤普段の生活に役立つと思いますか

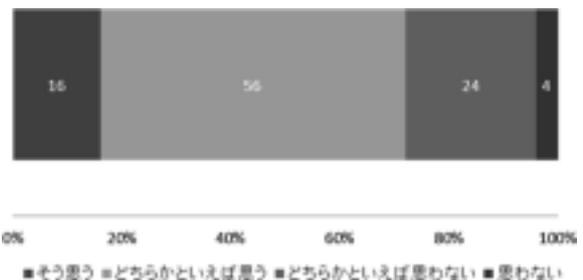


図5 普段の生活に役立つと思いますか

普段の生活に役立つと答えている生徒は、全校の72%である(図5)。心豊かにする(図4)と答えている88%の数値と比較すると、生活に役立つとは思わない生徒の数がやや多い。回答の内容としても、「どちらかといえば」の方が多くなっている。

図5については、数値としては低いわけではないが、美術は生活に役立つものというよりは、心を豊かにするものだととらえているのであろう。

本中学での美術の授業内容の傾向からは、例えば鑑賞が名画による鑑賞などが多いことや、日常生活と密接に関わる制作が少ない点が上げられる。

日常生活の中に色や形はあふれている。それをどのように創り出すか、どのように選んでいくかを考えられる授業設定が必要であろう。

⑥絵や彫刻など美術作品を鑑賞することはありますか

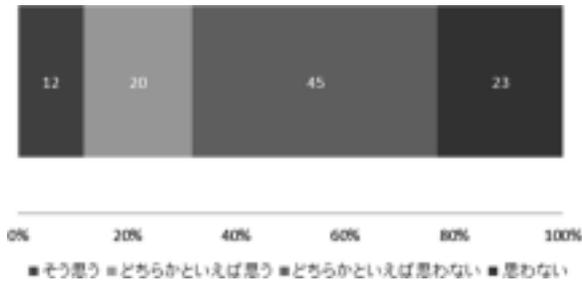


図6 絵や彫刻など美術作品を鑑賞することはありますか

美術作品を鑑賞する経験は、美術館に行くまでの経費や家族の興味など家庭環境による面が大きい。全校32%が行く、どちらかといえば行くと答えている。しかし全体の中では行かない、ほとんど行かないと答えている生徒は68%である。鑑賞についての数値は低いですが、前任教で美術作品を鑑賞する経験を聞いたところ、行く、どちらかといえば行くと答えた生徒は10%であった。全国平均などと比較はできないが、筆者の経験の中では鑑賞する経験を持った生徒が多い地域と考察できる。

3-3 自由記述から

「美術の授業で、どのようなことを学びたいか」(自由筆記・複数回答)という質問を自由筆記で行った。

生徒の自由筆記については、学習指導要領の中の領域をもとにA表現については①「発想や構想の能力」②「創造的な技能」、B鑑賞では③「鑑賞」、④「これから取り組みたい表現」ということから分類した。

①A表現【発想や構想の能力】に関して

以下生徒の自由筆記を学年ごとに一覧にまとめた(表4)。

さらに文章から「発想力・工夫の仕方」「表現力」「心を豊かにする」「作り上げる喜び」に分類し、学年ごとに図示した(図7)。

表4 「発想や構想」に関しての自由筆記

1年生	「いろいろなアイデアが浮かぶようになりたい」 「工夫しながら描いたり、つくったりすること」
2年生	「自分の考えていることを絵などできちんと表現すること」 「作品をつくりあげていくことの楽しさ、想像力が豊かになるような学びをしていきたい。美術を好きになりたい」 「一つの気持ちを表現するには、いろいろな表現の仕方がある。表現力をつけたい」
3年生	「美術に対する向き合い方を学んで、大人になってからも、美術に親しみ、心が和めるようにしていきたい」 「これからの自分の未来に役立つ、人として成長できるようなこと」 「様々なものを見て、色々な感情を読み取れるようになったり、新しいものをつくることにより新しい発想を浮かべられる豊かな心」

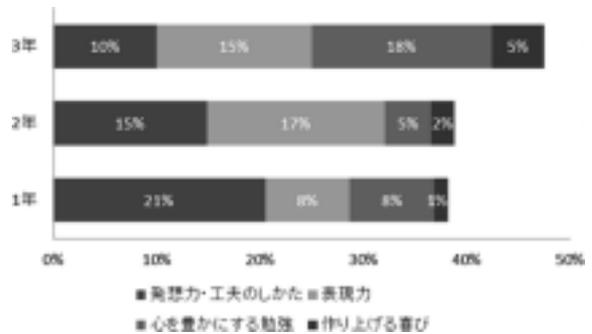


図7 A表現【発想や構想】に関して

結果からもわかるように学年ごとに身につけたい力に違いがあることがわかる。「発想する力を身につけたい」と考える1、2年生に対し3年生は18%が「心を豊かにする」ことを学びたいと考えているようだ。

文章からも1年生では美術の授業に対して、作品を制作する際の発想やアイデアを出す力をつけることを求めている。3年生は文章に将来の自分を予想し、美術を通してよりよい自分を目指す傾向が見えてくる。

②A表現【創造的な技能】に関して

表5 「創造的な技能」に関しての自由筆記

1年生	「絵を描く時の技術」「グラデーション」 「糸鋸で思った形に切れるようになりたい」 「アイデアを作品に出せるようにしたい」
2年生	「絵の描き方や表現の工夫の仕方」 「グラデーションやレタリングなど。デザイン」 「色を上手に使う方法」
3年生	「上手な絵の描き方、色の使い方、デザイン等。頭で考えたことを表現できる力」 「絵を描く技術や自分の気持ちの表現方法」 「より自分の思っていた通りにできるように、いろいろな色をグラデーションしてみたり、浮き彫りしてみたりする」

自由筆記から、「創造的な技能」に関する内容を整理し(表5)、多く表れた言葉をもとに学年ごとにグラフ

にまとめた(図8)。

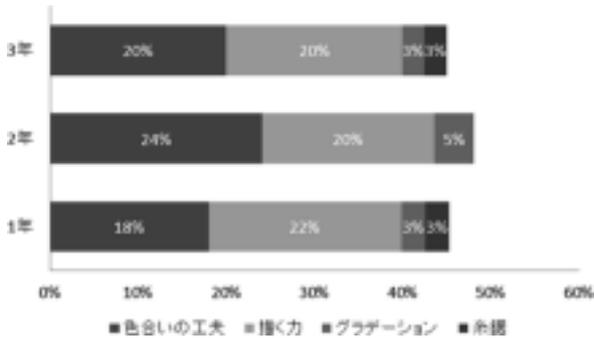


図8 A表現【創造的な技能】に関して

自由記述からも、各学年共通して、「絵が苦手だから写真のように描くコツを学びたい」や「考えたようにつくりたい」という思いを形にできないもどかしさが見られる。

学年からみると、糸鋸をあげた1, 3年生はアンケート直後に糸鋸を扱うことになっていた。グラデーションは1年のデザインで学んでいる。生徒たちにとって学んだことがあるまたは現在取り組んでいる作品を想定してアンケートにこたえている傾向があり、印象に残った技能が自由筆記としてあがっている可能性もある。

③B鑑賞に関して

表6 「鑑賞」に関する自由筆記

1年生	「世界中の美術家のこと」 「作家が絵を描いた背景を知ること」
2年生	「世界の彫刻や絵の鑑賞」「絵画の歴史」「美術を発展させた人物の一生」 「歴史的な建造物、人物、その人の生い立ちなどについて」 「いろいろな人の考えるデザインや作品を鑑賞しているものを自分に取り入れたい」
3年生	「有名な画家の描いた作品をじっくり鑑賞して、絵の歴史をしりたい。」 「自分にはない芸術を学ぶこと。他の人の作品などを見たりして自分の考えと比較したい」

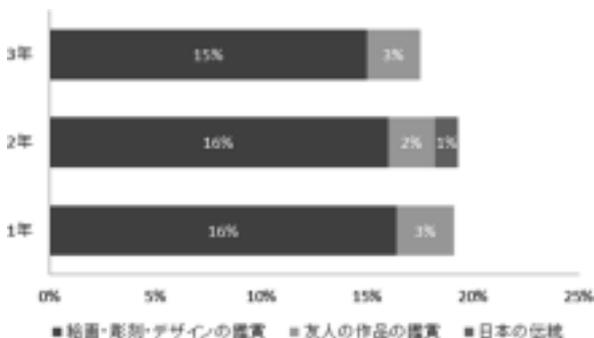


図9 B鑑賞に関して

生徒が求めている鑑賞は友人の作品の鑑賞が2.5%であるのに対し、絵画・デザイン・彫刻の作品は15.8%と高い(図9)。

アンケート回答へのいくつかの影響を考えると、アンケート前に「70枚の名画からお気に入りをみつけよう」

(表1)という鑑賞の授業を展開した。その授業の中で「この作品は社会の資料集で見たことがある」というつぶやきが出てきた。歴史を学んだ経験が、美術の鑑賞にもつながるのだが、レンブラントの作品を鑑賞しながら「テレビでこの作品の秘密を見た」と話す生徒もいる。画家の生涯や作品を描いた背景を扱うテレビ番組も多く、その影響もあるだろう。

自由筆記の記述(表6)を見ると、「歴史」や伝記などの情報を知りたい生徒の気持ちがみえてくる。学年があがるにつれて、鑑賞についての記述は弱冠少なくなるが、自由筆記の内容を読むと、より具体的な希望や、自分と作品のかかわりが見えてくる。

既習教科や学んだ経験であったり、「自分の表現にとり入れたい」等と制作者の思いが現在の自分の思いとつながったり、中学生の時期というものを考えた時に、鑑賞の授業には重要な時期ではないかと思える記述もあった。

④「これから取り組みたい表現に関して」

その他であがったものは、パソコン、皿の模様を付ける、ガラスを使いランプ、染物、版画、アニメ、さまざまな表現方法を学びたい、時間をかけてつくりたい等である。自身が表現した経験があるもの、廊下展示された作品から制作したいと考えたものがあげられた。

「制作できればいい」と答えた生徒は美術の授業を好きと答えており、表現することに喜びを見出しているのだろう。「家でできない作品づくり」をあげている生徒はダイナミックな制作を望んでいる。

⑤自由筆記全体を通して

今回の自由筆記に関してまとめたところ、3年生の文章量が一番多かった。また3年生は、「自分の想像を豊かにして、工夫した作品をつかって美術を存分に楽しみたいです。そして将来の趣味で時計などをつくらしてみたいです」「美術に対する向き合い方を学んで、大人になってからも、美術に親しみ、心が和めるようにしたいです」というように美術の表面部分ではなく、美術を通して身に付けたいことが記述されている。

もちろん自由筆記からのみ、考察をすることはできない。ただ、1年から3年までの自由筆記の内容を分析すると、美術の技法的な側面だけではなく、美術を通して学びたいことが記述されていることが多くみられた。

その意味では、1年生よりは2年生、2年生よりは3年生が、徐々に美術の学習の意味について、その本質的な意味をとらえ始めている部分が見えてくる。

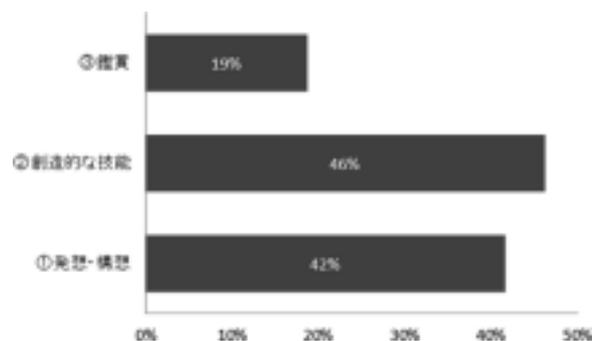


図10 学びたいこと(全体)

全体を通していえることは、「創造的な技能」を身に

つけたいという生徒が46%おり、続いて、発想構想についての興味関心があることが分かる。

表現するためには、発想や構想の能力と創造的な技能の2つの要素が必要となってくる。この力をバランスよく、いかにつけていくかを考えていかないと生徒は表現する喜びを見出せないだろう。

### 3-4 美術の「嫌い」な生徒の分析

嫌いという意識が、学びたいことに影響しているかこの稿では見ていきたい。

まず全校の中でどちらかと言えば嫌い、嫌いと答えた生徒は、全校生徒の9%である(図1)。嫌いな子どもたちの自由記述「美術でどのようなことを学びたいか」を分析する。

表7 自由筆記の分類

美術の学習で学びたいこと	人数	分類
「いろいろなアイデアや、考える力をつけたい」	14%	発想
「絵を上手く描く方法」	27%	技能
「世界の美術作品の鑑賞」	18%	鑑賞
「いろいろな絵の描き方、たくさんのアイデアが浮かぶようにしたい」	14%	技能 発想
「絵や彫刻などでの技術の部分や人がどのような鑑賞をしているかを知ること」	9%	技能 鑑賞
「絵や美しさに感動できるような心と独自の作品をつくるようなアイデアや発想」	5%	発想 鑑賞
「染物」「折り紙に取り組みたい」	9%	その他

(数値は「嫌い」「どちらかという嫌い」と答えた内)

分類は、「美術の学習について」(表2)の自由筆記を、学習指導要領をもとにA表現【発想や構想の能力】については「発想」、A表現【創造的な技能】については「技能」、B鑑賞については「鑑賞」、これから取り組みたい表現については「その他」、に分類した。

#### ①アンケートから

男女比については、「嫌い」と答えた生徒の中で男子は86%、女子は14%であった。

「美術の学習で学びたいこと」としては、技能面を記述した生徒は、嫌いと答えた中では、50%であった。その中で20%の生徒が「絵を上手く描けるようになりたい」と記述しており、思いを形にできないことがわかる。

「発想力」と答えた生徒は32%。「～をつくらう」という教師の問いかけに授業中、アイデアが浮かばず悩んでいる姿が浮かんでくる。

「鑑賞」に関しては28%である。名画や歴史の背景を知りたいなど知識を増やしたいと考えている生徒がいた。

この結果は、嫌いな生徒は、絵画に対する苦手意識がまずあげられる。デッサン力、絵の具による着彩に苦手意識を持つ傾向が強い。デザインに関しては、発想が浮かばないと回答するなど、周囲の友人が制作中に、さまざまな工夫をする中でアイデアが浮かばない生徒の苦悩を考えることができる。

#### ②美術の嫌いな生徒の傾向

嫌いと答えた生徒の教科の好き嫌いを見ていくといくつかの傾向がわかる。「嫌い」「どちらかという嫌い」と答えた生徒のうち、すべての教科を嫌い、まあ嫌いと答える生徒はいない。好きな教科もあるが美術はまあ嫌い、嫌いと答える生徒であった。教科間の相関関係は不明であるが、美術だけではなく、ものをつくる授業を好まないという傾向の生徒もいた。今回の調査では個人を特定できない形での調査のため、個人の生活歴から測ることはできないが、ものをつくる経験の有無についても調査の余地がある。

#### ③美術の嫌いな生徒と鑑賞の関係

「アイデアが浮かぶようになりたい」と自由筆記した生徒は、美術館に行った経験を全員が「ほとんどない」と答えている。嫌いと答えた生徒の86.3%は美術館に行った経験を行かない、ほとんど行かないと答えている。発想力の源となる「見る」経験不足もアンケートから考察できる。

#### ④まとめ

「美術の授業でどんなことを学びたいですか」という自由筆記の欄を設けた。過去、筆者自身が行ったアンケートにおいて、自由筆記の欄を設けても未記入がある場合も多かった。特に「嫌い」と感じる生徒は記入しない傾向が高い。しかし、今回のアンケートでは240人中、未記入・特になしの生徒は13人(5.4%)であった。嫌いと回答した生徒が自由記述をした割合は比較的高かった。

アンケートを通して、好き、嫌いを問わず、ひとりひとりの生徒が美術の授業で発想・構想、技能、鑑賞、その他、学びたいことがあることがわかった。

これまでの筆者の題材を考えていく方法としては、「生徒指導の実態」が大きかった。しかし3年生の自由筆記にある「美術に対する向き合い方を学んで、大人になってからも、美術に親しみ、心が和めるようにしたい」という言葉からもわかるように、美術科の目標を知らずとも、3年間の間に次第に美術科の目標を意識し、授業に向かうようになってきている生徒もみられる。教師の意思で目標をもとに教材づくりを行うことは前提であるが、生徒の思いを聞き、授業の展開方法や、題材の内容を工夫していくことで、授業がより生徒の実態に近いものになっていくのではないかと考察できる。

#### 3-5 アンケートから得られたこと

アンケートを通して、本中学の生徒の実態としては、美術の授業自体は好きであり、表現する楽しみを持っていることが見えてきた。また経験値からの比較になってしまうが、鑑賞への興味があることも見えてきた。

授業内でのことについては、多い割合ではないが、発想を表現方法に結び付けることができないと感じる生徒がいることが分かった。それは、技能面を学びたいと回答していることからもうかがえる。

また、美術の授業で学びたいこととしては、自由記述での回答からは、美術に対して向き合いたい、いろいろな感情を読み取れるようになりたい、家ではできないことをしたい等が書かれていた。数値としては多くはない

が、美術の本質に触れる部分であったり、学校の中での美術教育を考えた時に、これらの言葉が生徒たちから出てきたことを、授業構成時には受け止めていきたい。

#### 4. 授業提案

アンケート調査から得られたことをもとに、題材の検討を行いたい。

その際に、これまで行った授業の中で、それらの発想や技能を助けるための手立てを講じた授業について、アンケートの実態より再検討を行うもの（実践A）。実践Aでの再検討された課題とアンケートで得たことをもとに実践を行ったもの（実践B）を、本稿では掲載する。

実践A、Bについては、生徒の中で比較的関が高く、かつ表現と鑑賞の橋渡しとなる授業の実施を試みることにした。

##### 4-1 実践A

実践Aでは、「今の私から、なりたい未来の私へ～色や形の変化で自分を表現しよう～」というテーマで自分の分身を作成した。実践Aについては、筆者の経験より、本調査前より感じていた技能のサポートを制作段階では取り入れた。具体的には、絵の具の使い方等、既習内容を用いることができ、形については自分自身を写し取るということを行った。また制作の際の相談のサポートとして大学生や美術館と連携を行い、他者とのコミュニケーションも盛り込んだものである。また、各クラス美術室で制作を行うのではなく、体育館において学年全体で行い、お互いの作品を見合うことのできる環境設定をした。それらの前提のもと取り上げた内容を述べる。

##### ①実践内容

平成23年9月に全校生徒による「今の私から、なりたい未来の私」の制作を行った（写真1）。この作品では、等身大の自分を紙に写し、その自分の人型に、色や形の変化をつけることで自分の心情を表現しようという題材である。全校生徒が制作し、千葉県立美術館に全校の作品を展示する（写真2）。千葉大学教育学部美術科と連携し、自分なりの思いを形や色にできない生徒に関しては、大学生や大学院生にアドバイスをもらう。色や形をもとに自分を表現し、美術館に展示された友人の作品を鑑賞することで、見る力を養うという題材である。

中学校における作品制作後、全校生徒の作品を平成23年9月に千葉県立美術館第6展示室で行われた本校の作品展で展示した。

来場者数は以下の通りである。

来場生徒96名（内訳 1年23/76人 2年33/91人 3年40/84人：左は来場者数、右は全体数）、来場保護者66名（内訳 1年17/76人 2年24/91人 3年25/84人）であった。

学年が上がるにつれて来場率が上がったのは、部活動が終了した3年生という時期や職場体験や上級学校訪問を経験し、行動範囲も広がっていることも大きいと考えられる。また、保護者が来場した生徒は、ほとんどの場合、本人が来場している。

実践Aにおける美術館への来館については、i 生徒が親に作品展について話し、保護者も興味を持って来場

するケース ii 保護者が作品展に興味を持ち、子どもを誘って来場するケース iii 生徒同士で来場するケース iv 保護者が興味を持ち、単独で来場するケースがあることがわかった。



写真1 生徒の作品から



写真2 美術館内での展示と生徒によるギャラリートーク

##### ②実践に至るまでの経緯と残された課題

制作時においては、アンケート調査に表れていた、発想を表すための技能に苦慮しているということに対しての手立てを次の内容で行った。

既習内容を用いることができるという技術的情報の取得、生徒同士が一度に制作することで視覚的情報を得やすい環境づくり、大学生が入ることで相談できる環境づくり、等である。そのため、自分の発想を表わしていくという表現領域でつまづく生徒は見られなかった。また、技術的サポートを行ったことで、自分を表すための色や形を考えるという発想部分に時間をかけることにつながったのではないかと考える。

制作については、生徒の実態の調査において、表現したいことを表すための技術面に苦手意識を持っている生徒へは、既習内容をとり入れ、大学生も入ることで支援されていた。また、美術の授業へとり入れてほしいものとして、家でできないものをつくりたいというコメントがあったが、そのような声に対応するものであったといえる。

本実践は、表現と鑑賞がひとつになった題材である。その鑑賞面に課題が残った。

全校生徒251名のうちの38.2%が美術館に来場したのだが、美術館において鑑賞していない生徒が校内で42.8%いることがわかった。

来場した生徒の会話の中で、「この貼り方が……」という声が聞かれた。展示した日が平日のためすべて教師、ボランティアによる掲示であったという現状があるにせよ、生徒個人の作品に対する思いとは異なる展示であったと言える。

##### 4-2 実践B

実践Aはつくるだけではなく、鑑賞を行うことで、さ

らに深まる内容であった。そこで、生徒の実態の調査にも記されていた「向き合う」ということをさらに深めるため、また美術に対して「嫌い」という意識を持つ生徒が、作品を見る経験の不足などもあるという実態からも踏まえて鑑賞についての検討をすることにした。

再度検討し、美術館から校内という身近な場に展示場所を移し、生徒の意思で展示を行おうと考えた。

新たな授業テーマを『磯辺第一中学校を美術館に～「今の私から、なりたい未来の私」を校内の似合う場所に展示しよう～』と設定した。

①授業の目標

- ・自分の作品の展示場所を探すことを通して、自分をみつめる
- ・色、形、場所から作者の思いを自分なりに感じとる

②生徒に提示した内容

授業の目標を受け、「自分の分身を校内の中で最も自分に似合う場所に展示しよう」「掲示された全校の作品を鑑賞し、感じたことを言葉や文章で表そう」と生徒へ導入時に提示をした。

③対象学年 1～3年生

④授業の時間数 15分掲示, 50分鑑賞

⑤展示場所

展示にあたり、普段使用する教室以外は全て展示するという条件の設定をした。具体的な場所は以下の通りである。A棟1階廊下, B棟1, 2階廊下, C棟1, 2階廊下, 昇降口。

⑥展示期間 平成24年2月1日(水)～2月23日(木)

⑦授業計画

ここでは、2年生の授業計画を参考までに掲載する。

表8 授業計画

	生徒が行った内容	教師の提示, 支援
導入	「校内のお気に入りの場所にあなただけの人型を展示しよう」というテーマの把握	・テーマの提示 ・貼り方の方法 ・貼る場所などのルールの確認
展開	・各自、自分の制作した人型を持って移動	
まとめ	・全クラスの「同じ出席番号」の人を探し、いいところをみつけて感想を書く	・B6用紙の感想カードを配布 ・集合時間の確認
課外での活動	・1人8枚の感想カードを書く ・読む ・授業後アンケートに記述	

⑧授業の様子

授業内での生徒の様子を掲載する。写真下の会話は、生徒のつぶやきを筆者が拾ったものである。



写真3 展示場所を選ぶ

「ゴールキーパーが跳んでいる感じを出したい。」



写真4 校内に展示された作品

「昇降口にある絵。絵の下に絵という自分の発想に驚くよ。学校で一番目立つのは俺たちのはず。」



写真5 校内に展示された作品

「この窓からいつも練習しているテニスコートが見える。テニスコートの近くに私をおきたい」

⑨授業を終えて

自分の人型を持ち、それぞれが思い思いの場所に移動し、展示した。なぜその場所に展示をしたのか、生徒からの言葉を、授業後にアンケートを通して得た。

「保健の先生に相談にのってもらっていたから、保健室の近くに展示したい。安心できる場所だから」

「いつもバレーの練習している体育館の見えるところ」

「吹奏楽の練習しているこの被服室前の場所に」

「正門から見えるところに。登下校中のみんなに見せる」

「給食が好きだから、給食室の前に」

240名がそれぞれの思いの場所に展示したのだが、話を聞いていくとひとりひとりに展示場所への思いが分かった。

⑩授業終了後のアンケート

授業終了後の全校の中の自分の人型を鑑賞してどのように感じたかアンケートを行った。

#### 4-3 授業提案を終えてみえたこと

実践Bでは校内展示をしたが、他にも得られたこととして、他教科の教員が、担任をしている生徒の作品をみて、子どもの思いに気づいたり、なぜここに貼ったのかを考えたりすることで、別の一面を知ることができたということを知った。作品を媒介として、生徒と教員のコミュニケーションを図ることができたともいえる。

#### 4-4 「生徒の実態」と残された課題

今回は「好き」「嫌い」という興味の問題から、さらに美術を通して何を学びたいと思っているのか、ということについて実態調査を行った。

題材の検討では、生徒の興味のある、好む率が高いということに傾きがちになるが、本研究では「嫌い」の生徒についても、その理由を尋ね実践の中に盛り込んだ。

今回は無記名アンケートとしたため、「嫌い」な生徒が、どの程度美術への興味関心が高まったが、個人追跡で測ることはできないが、授業を通しての変容についても「嫌い」と答えた生徒の変容を追いかけてみたい。

興味関心も大切であるが、美術の授業を行うにあたって、「発想や構想」と「技能」のバランスをどのようにとっていくかと考えることが教師にとっては重要であるということが改めて認識された。発想がなければ、技能も用いることができないし、技能がなければ発想を生かすこともできない。

また、題材について本稿でとり上げたもの（実践B）は、学校内に作品を展示するというものであった。中学校で美術の教室のドアから校内とはいえ外へ出て展示を行うということは、教師にとっても実はハードルの高いものである。この展示をする前に検討をした会議では、悪戯など心配もあったが「生徒たちの自治に任そう」ということで了承された。授業を始める前に生徒会長に「全校の生徒の作品を掲示して、悪戯されないかな？」と聞いてみた。「大丈夫です。そんな人はいませんよ」悪戯は一度もなく、展示期間は無事に終了した。

千葉市立磯辺第一中学校は、本年度で統合のため閉校となるが、本中学校で得た調査は、今の中学生の一実態として、今後の中学校の美術科教育の題材研究のための基礎調査としていきたい。

### 5. 結びに

今回の研究では、中学生の時期の子どもたちがどのようなことを考え、美術の授業に取り組んでいるかを確認することができた。生徒たちは、美術の技法といった表面の部分だけではなく、心の成長も含めて美術を通して自分なりに学びたいと考えていることが現れてきた。

今回は実践との関連のため、調査対象が一校であった。今後は他の中学校での調査や、または中学生を質的に追うということも考えられるだろう。

また生徒の実態から、これから求められる授業について考えるのみではなく、生徒の成長にかかわるためには、どのようなことが目標になりうるか、また現在の時間数の中での内容にはどのようなものがあるか等、山積する問題と一つ一つ向き合っていきたいと考える。

### 参考文献

- 1) 「中学校学習指導要領解説 美術科」文部科学省 平成20年
- 2) 「ベネッセ第4回学習基本調査報告書・国内調査・中学生版」2006 ベネッセコーポレーション  
全国統計での教科の「好き（好き・どちらかというところ好き）」の割合は次の通りである。（ ）内数字は本中学校において、割合が高かった教科について記した。  
理科53.1%、数学45.0%、国語42.1%、社会41.1%、英語39.4%（+13%）、体育67.1%（+11.2%）、美術49.0%（+41.4%）、音楽47.2%（+21%）、技術・家庭45.6%（+29%）、総合的な学習の時間42.0%（統計がないため比較せず）